

私の話の内容に関して、1) これまでと最近の研究について、2) 男女共同参画について、の2つの要望が寄せられた、と世話人から聞いています。大学の運営と経営の責任者としての多忙な日々を過ごしていますので、私が研究に使える時間は限られています。しかし、今も、研究に関わっている時ほどエクサイトする折はありません。一方、こどもの頃から、女性には男性よりも制約の多いことに気づき、制約が減っていくことを夢見てきました。男女共同参画社会の実現は、研究と同じように大切な事であると気づき、積極的に行動を開始したのは、名古屋大学で定年を間近にした60歳頃からです。私にとって、学長としての仕事に加え、研究を続けること、男女共同参画のために働くことはどちらも大切な生き甲斐です。2つとも、お話しします。

1. 研究のこと

私の研究経歴には特徴があります。物理学で学士、修士、博士の学位を得て、化学教室でポストドク修行、定職が無い研究生と非常勤講師の時代、生物学科で助手から教授となり、バイオテクノロジー学部で学部長、そして現在に至る節目節目で、異なる学科や異なる大学に移ったこと、つまり実質的な居場所が変わったことです。これは研究への興味や、やってみたい仕事にしたがって、自らが選んだ結果です。

場所を移ったことが、たくさんの研究者とめぐり会う機会となり、何を研究すべきなのか、どのようにして研究を進めるのか、自分が誇れる能力は何か、積極的に自分の研究を発信する、批判や助言を喜んで受ける、ポストを得るために多くのひとに会う、周囲のひと（研究者に限らない）から学べることはすべて吸収する、常に世界を舞台に研究を続ける、さらに、人としての生き方を学ぶために、大いに役だったと思っています。

物理や化学を基盤として生命現象を理解することは、20世紀後半の生物学に大きな進展をもたらしました。その代表はDNA 2重らせんの発見に象徴される生物物理学や分子生物学の台頭です。物理学は美しく体系化されている学問ですが、生物学の多くの研究は、今も、記述学問とっていいと思います。一方、21世紀と共に、ゲノム解析の急速な発展と情報の蓄積に伴って、生物学は大きく様相を変えようとしています。網羅的解析から総合化へむかう生物学の流れを、大きな視点からとらえて、生命科学の進む方向を概観してみたいと思います。その中で、「蛋白質の部品モジュールの発見」を中心に、物理学から生物学へと、興味の赴くままに進めてきた研究の話をしたと思います。

海外での研究生活、講座制という名の研究室に所属していたことで、最先端の研究動向を耳から学べたこと、その分野で注目されている海外の研究者が多く訪れる研究室であったこと、さらに私の研究を海外で最初に認めていただいたことが、日本の研究者の目にとまることになったことなど、科学のもつ国際性を改めて考えてみたいと思います。

2. 男女共同参画の社会の実現にむけて

研究に対して強いあこがれやこだわりがある人間で無ければ研究者にはなれません。しかし、研究をしたいと思っても、私が学士課程を終えた頃には、女性が理系研究者になる道は、わずかな例外を除けば閉ざされていました。唯一、女子大学が例外でした。お茶の水女子大学には、私が入学した50年前のことですが、数学、物理学、化学、生物学(当時は動物学と植物学)、の分野に女性の教授または助教授が沢山いたのです。この女性教員たちの存在に触発されなかったら、私は研究者にはなろうとはしなかったと思います。この間のことは拙稿「私が研究者になるまで」(「学術の動向」2008年7月号掲載予定)を参照ください。

今、日本は先進国の中で、女性の進出が極めて遅れている国であることは、女性研究者が占める割合が12.4%だという数値にも示されています。昨年、韓国は日本を抜きましたし、国際的に見ても、恥ずかしい状態です。女性の研究者がふえるために、基礎的な現状分析のデータが必要です。大学レベル、学会レベル、国レベルで、今、なされている取り組みを紹介して、何を変えていくことが大切か、考えてみたいと思います。